



松の枝を結ぶ心

奈良時代の官人・大伴家持は『万葉集』で最多の歌を残しており、最終的な編者と考えられています。『万葉集』は七五九年正月に家持が詠んだ歌で閉じられており、その歌番号は四五七一番。今回の四五〇一番歌は、『万葉集』の終わりに近い部分の歌です。

七五八年二月、平城京右京二条二坊（現在の西大寺国見町）にあった中臣清麻呂の邸宅で宴が催されました。主人である清麻呂と参加者たちが歌を詠んでおり、家持もその一人です。時期は現在の三月後半ごろにあたり、この前の歌には「梅」が詠まれています。続く今回の歌では「八千種の花」が詠み込まれ、松と対比されています。梅も散り、桜もやがて散ってしまう一方、松は常緑であり、永遠の象徴とみなさ

八千種の花はうつろふ
常磐なる松のさきを 我は結ばな

大伴家持 卷二〇（四五〇一番歌）

訳 さまざまに美しい花は衰えてゆきます。常緑の松の枝に永遠の願いをこめて、私はそれを結びましょう。

れました。それを「むすぶ」という行為は、植物の生命力を取り込む呪術でした。枝を頭髮に挿す「かぎす」や頭に載せる「かづらく」にも同様の力が信じられていました。『古事記』のヤマトタケルの辞世歌にも、平群の山の立派な榎の葉を髪に挿して長生きするように、と歌われています。

さて、家持は七四四年正月にも「たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ」（靈魂の極みの命はわが手の中にない。ともあれ松の枝を結ぶ私の気持ちは、命長かれと思うことだ。／卷六・一〇四三番歌）と松の枝を結ぶ歌を詠んでいます。このときは聖武天皇の御子・安積皇子の長寿を思っていたようですが、叶いませんでした。



向け、「常磐なる松のさき」の歌を詠んだと考えられます。この後、中臣清麻呂は正二位にまで昇り、七八八年に八十七歳で亡くなりました。家持の松の枝を結ぶ思いが実つたのでしょうか。
（本文 万葉文化館 阪口由佳）

ちゃん
の
つばき
万葉

和歌や作者などに
関連するものを
紹介するよ!



万葉ちゃん

大伴家持と大伴旅人

大伴家持は、奈良県内をはじめ赴任先でも数多くの歌を詠み、『万葉集』で最多となる470首以上の歌を残しています。家持の父・大伴旅人は元号「令和」の典故となった『万葉集』巻五「梅花の歌三十二首」の序文の作者としても知られています。この宴で旅人は梅の花を雪に見立てた歌を詠み、家持もその後、父の歌を踏まえて「我が園の李の花か庭に降る…」（巻十九・四一四〇番歌）と李の花を雪に見立てた歌を詠んでいます。



万葉の森の万葉歌碑
（巻十九・四一四〇番歌）

所 橿原市南浦町